

二〇二四年九月二〇日

曼珠沙華火花のやうに池鏡
訪ふたびに過疎化を思ふ秋彼岸
これ何と口々に問ひ棗の実
豊秋の源なりし大河かな
葛の花溢し離るる小灰蝶

康子
みきお
うつき
澄子
むべ

二〇二四年九月一九日

涼新 た 松 の 匂 ふ 能 楽 堂
御仏の指先にある秋思かな
ベビーカーはみ出る手足秋涼し
爽涼や貴船の川床に瀬のたぎち
山嶺の黒屏風なす秋夕焼
みどり児の泣き声洩るる月の路地
棟上げの柏手ひびくいわし雲
秋簾ほつれしままに畳まれる
峠越え見渡す限り紅のそば

なつき
澄子
みきお
千鶴
むべ
あひる
風民
明日香
董雨

二〇二四年九月一八日

松手入れと見かう見して空鏃
吾子とある亡夫の書齋けふの月
叢雲をうてなに月の出でにけり
二棹の三味の音揃ふ良夜かな

澄子
むべ
せいじ
風民

二〇二四年九月一七日

ストリートピアノを弾くは日焼の子
月今宵影絵のごとく五葉松

あひる
風民

青空に呑み込まれゆく秋の雲

康子

繕ひし籬次々小鳥来る

澄子

中庭に琴の宴や月今宵

風民

二〇二四年九月一六日

立話切り上げがたく暮れ易し
梁高き古民家に聞く昼の虫
敬老の日の卓に笑む母白寿
大沢の広き水面に望の月

澄子
むべ
せいじ
千鶴

二〇二四年九月一五日

早逝の夫と祝はむ敬老日
露葎搔き分け進む犬の鼻
病室の窓いつぱいに揚花火

こすもす
みきお
康子

二〇二四年九月一四日

苔清水うましうましと漱ぐ
厨窓イナバウアーに反る守宮
鉄橋の電車包まる秋夕焼
月の出や古りし舟屋の家並寂び
子規庵の花も実もなき糸瓜棚
敷きつめし丸石涼し洲浜かな

うつき
明日香
もとこ
幸子
なつき
むべ

毎日句会みゆる選・二〇二四年九月二三日